

## 要旨

本博士論文「戦後日米芸術理論と実践におけるマルクス主義理論の影響と再創造」は、赤瀬川原平、彦坂尚嘉、中平卓馬、アラン・セクーラ、マーサ・ロスラーらによって書かれた芸術理論および写真理論の集中的読解をひとつの目的としている。1930年代から1950年代初頭に生まれた上記の芸術家・写真家はみな、ヴェトナム戦争反対運動、学生闘争、女性解放運動などの社会運動に直接的・間接的にコミットしてきたが、彼女らの著作は、主として1960年代後半～1980年代の期間に、そのような社会運動の中で、そしてそれらの運動が後退していく中で、どのようにして批判的な実践を練り上げるかを念頭に書かれている。彼ら関わっていた社会運動においてはマルクス主義、とりわけ歴史家ベリー・アンダーソンが「西欧マルクス主義」と呼んだマルクス主義思想家たちの理論的著作が重要な役割を果たした。本論においては、それぞれの芸術家・写真家に対するそれら思想家——アンリ・ルフェーヴル、ヘルベルト・マルクーゼ、ジェルジュ・ルカーチ、ヴァルター・ベンヤミンら——やその他の著述家の影響関係を明らかにしながら、彼女たちの理論的著作を精読し、彼女たちが取り組もうとしていた政治的・美学的課題を明らかにする。また、赤瀬川、中平、セクーラ、ロスラーを扱った章についてはそのような理論読解を行なった上で、1980年代

以後に彼女たちが発表した作品の分析を行い、理論的著作と実践がどのように関わり合っているかをそれぞれの芸術家・写真家に応じて検証した。

上記の課題に取り組むにあたって、序章においては、日本と合衆国におけるニューレフト運動が「美術史」という学問領域に与えた影響および「マルクス主義」理論の学問上の位置付けの変遷を簡単に追った後、各章の構想に関わる理論的枠組みを提示した。日本の美術史の言説においては、テオドール・アドルノの『美学理論』の議論は視覚芸術や現代芸術実践とはあまり関連づけられて論じられることがないが、アドルノの美学理論は資本主義のもとにおける芸術の存在論を根本的な次元で思考したという点で、現代芸術を思考する際に必須だと思われる。そこで本章では、彼の批判的な自律性の捉え方、芸術作品と解釈との関係の捉え方を中心にアドルノの美学に関する議論の一部を再構成した。ただ、その議論が重要であるとはいえ、芸術の制度化がかつてないほど進んでいる現代において、彼の『美学理論』において評価される芸術モデルが唯一の回答ではなく、アドルノの考えは、彼の論敵となったベルトルト・ブレヒトのリアリズム論との緊張関係のもとで考えられる必要があるため（セクーラやロスラーは事実、芸術のモデルとしてはアドルノの立場と部分的に重なるマルクーゼやクレメント・グリーンバーグの美学を批判する形で彼らのキャリアを開始した）、ブレヒトのリアリズム論の重要性も同様に論じた。その美学と政治に関する議論

の後で本章は、赤瀬川、中平、セクーラ、ロスラーがそれぞれ実践を通して問題化している戦後期の空間の再編成およびその再編成の原動力となった経済の変化を簡単にたどった。その際、セクーラとロスラーが作品において問題化しているロジスティクスの拡張に関する議論を参照し、彼女らの批判的実践の背景を記述した。

第1章においては、赤瀬川原平（1937-2014）の『オブジェを持った無産者』（1970）の読解を行い、1960年代における彼の芸術の考えを分析した。その後で、都市空間の再編成に取り組んだ集団的写真实践として、1980年代前半の「超芸術トマソン」をアヴァンギャルドの系譜において読解した。その分析を通して、イデオロギー的には保守化を遂げた1980年代の彼の活動にも、1960年代の芸術理論の影響が残っており、（無意識的な形ではあれ）アヴァンギャルド的なものの再機能化が取り組まれていることを明らかにした。しかし、そこではアヴァンギャルドが提供すべき否定性がもはや失われ、批判的芸術実践としては結果的に失敗してはいるが、その失敗をどのように生産的に読むことができるかが重要であると論じた。

次章では、「日本現代美術」の歴史記述として代表的テキストである千葉成夫の『現代美術逸脱史 1945-1985』（1986）と榎木野依『日本・現代・美術』（1998）の内在批判的分析を行った。その際、彼らの議論の重要な参照先となっている彦

坂尚嘉の1974年の著作『反覆——新興美術の位相』を再読しながら、彼らの議論と彦坂の議論の差異も検討した。千葉と榎木の著作はそれぞれ「日本現代美術史」を記述しているが、それらからは彦坂の著作の中にはあったマルクス主義的な要素が脱落しており、その中でナショナリズム的な論理が前景化してきているように思われる。千葉および榎木の歴史記述における芸術実践は、特定の時代状況における特定の批判的可能性を有するものとしてよりも、日本の文化や日本のアイデンティティを導き出すための一つの装置となっており、ここでは彦坂のテキストの持つ可能性も同時に縮減されてしまっているように思われる。章前半部ではこのような榎木らの歴史記述が生じた1980年代～1990年代の日本の社会・経済状況に触れたが、改めて芸術批評における政治経済的な分析の必要性を示唆してこの章を終えた。

第3章においては、中平卓馬(1938-2015)の1970年代後半までの理論的著作および写真集『Documentary』(2011)をシュルレアリスムの観点から分析した。ここでは、特定の作品の様式や形式的特徴としてではなく、みずからの「生」を生きる解放的な実践としてのシュルレアリスムという見方を採用し、その観点が、中平に衝撃を与えた全共闘運動と沖縄の訪問を一貫して説明するものであると考え、1960年代半ばから1977年までに残した彼の写真批評を再読した。章の後半部分では、前半部での写真理論の読解から導き出された考えを文脈とし

て、2011年出版の写真集『Documentary』を、同様に実践としてのシュルレアリスムの観点から分析している。クローズアップで映された事物の不透明性が強調される写真が並置されるその写真集においては、事物そのものの解放が目指されていると同時に、中平自身の生と関わりがある客体も多く現れ——それは彼自身の自由を示唆する——、彼の写真はそのような二重の自由によって特徴付けられるように思われる。しかし、後者の中平自身の自由というものも個人的なものとしてあるわけではなく、多声的な発話からなる集団的コミュニケーションの媒介となるべきものとしてあり、彼の写真実践がそのような矛盾的コミュニケーションのあり方を求めた「自動筆記」の観点から解釈されうると論じた。

第4章の前半部においては、1970年代前半から1980年代半ばまでに執筆された合衆国の写真家・批評家アラン・セクーラ（1951-2013）の写真理論を精神労働と肉体労働の批判という観点から再読している。これまで、日本の写真研究の言説においては、セクーラの写真理論の理論的参照先——ミハイル・バフチンの言語理論、ハリー・ブレイヴァーマンの労働過程の議論など——に十分な注目が当てられず、それゆえマルクス主義的な側面が十分に理解されてこなかったが、本章では彼の写真理論の一貫した読解を試みている。また、この読解は彼が創作の方法として擁護していた「リアリズム」という概念を、日本の写真批評の言説

において問い直すことともつながっている。本章前半部では1980年代以後イギリスおよび合衆国において発展してきた写真研究の文脈を批判的に見直しつつ、当時支配的になっていった写真研究における写真理論とセクーラの理論の違いを明らかにした上で、1980年代以後価値が引き下げられていたリアリズム概念の批判的理解の可能性を示した。本章後半部においては、セクーラの写真理論の読解を念頭に、彼の代表作である写真集『フィッシュ・ストーリー』（1995）の分析を行う。その作品は、1950年代後半から普及し始めたコンテナ輸送の技術的發展に注目することで資本主義の再編成とグローバルな空間の変容、そしてその中で生じる海における労働の不可視化を主題としている。本章では、論文や逸話などの言語的テキストが作品の一部として写真と一体となったその写真集が、美術史、ドキュメンタリー写真史、資本主義の空間の再編成の中でどのような批判的位置を取っているかを分析した。

最終章においては、合衆国の芸術家マーサ・ロスラー（1943-）の批評的文章と写真集『公的なものの場で／公的なものに代わって——ある多頻度利用客の考察 *In the Place of the Public: Observations of a Frequent Flyer*』（1998）の分析を行った。章前半部においては、1970年代に彼女が参加していた社会主義フェミニズムの運動の思想と彼女の批評的文章を同時に検討することにより、創作実践の基盤ともなる彼女独自の「唯物論的フェミニズム」の思想的特徴を明らかに

した。その後で、彼女の芸術理解において重要である「経験」、「表象」、「ナラティブ」などの概念を彼女の文章を引き続き再読することを通して再構成した。そのような批評的文章の読解をもとに、空港や機内の空間の写真と、それらの空間の政治経済的条件やそこでの移動の経験を問題化するテキストが組み合わせられた『公的なものの場で／公的なものに代わって』を分析した（空路における移動に取り組んでいる点で、この作品はセクーラの海運輸送におけるコンテナへの着目と相補的な関係をなしているように思われる）。写真とテキストからなるその写真集は、アンリ・ルフェーヴルの『空間の生産』（英訳 1991 年）の影響を受けてまとめられているため、彼のテキストとの関係を示しながら、空港や機内といった空間における経験を分節化しようとするロスラーの実践の批判的可能性を論じた。